

「日本人、オランダ人、インドネシア人

ー日本占領下のインドネシアの記憶」

ワークショップ傍聴記

今井 昭夫

今回のワークショップは、オランダ国立戦争資料館（NIOD）が企画した巡回展「日本人、オランダ人、インドネシア人ー日本占領下のオランダの記憶」を海外事情研究所が開催するに際して、オランダ側の提供したものを「鵜呑み」にするのではなく、われわれの側から批判的にそれを検証してみる場として設定されたものである。この巡回展については、オランダ側から開催の打診のあった千代田区や長崎市などがいろいろな理由から開催を断っていたこともあり、当研究所のメンバーの中にも開催に二の足を踏むメンバーもいた。開催を最終的に決断するまでにかかなり手間取り、そのため巡回展やワークショップを準備する時間が十分になく、ワークショップの報告者も直前まで決めることができないほどであった。巡回展は1週間にわたって開催されたが、府中キャンパス・ガレリアでの最初の展示ということもあり、結構関心と呼んだようである。東南アジア課程のインドネシア現代史の授業ではこの巡回展を参観し、巡回展についての意見や感想をレポートに課したとい

う話をきいて、開催に関わったものの一人として大変喜ばしく感じた。

ワークショップは1月13日に開催されたが、開催に反対する外部の政治団体からの抗議などが、数日前から電話やファックスで海外事情研究所に届けられていた。予想以上の外部からの「反応のよさ」に驚くとともに、ワークショップを無事に全うすることができるのかどうか非常に懸念される事態になった。はたしてワークショップは大学の研究所が主催する通常のワークショップとはいささか異なる雰囲気の中で始められた。ワークショップは海外事情研究所の会議室で開催されたが、フロアー用に用意した100脚あまりの椅子がほぼ満席の状態となった。一部の政治団体が動員をかけたのか、そのグループの人たちが20人ほどいたほか、社会人の姿が多く目立った。あらためて「アジアにおける戦争の記憶」の問題は、研究者のみならず、戦友会や政治団体など一般の人にも非常に関心の高い問題であることを痛感させられた。ワークショップのねらいは、戦争の記憶に関する多様

な意見を対話させることであったが、フロアーの側から、そのような対話の場をそこないかぬような怒号や威嚇などが時折なされたことは残念であった。

ワークショップの各報告の内容については、改めてここで述べる必要はないと思うが、わたしの見たところでは、佐藤（弘）報告と林報告が賛否ともにフロアーからの反響が大きかったように思われた。佐藤報告では、展示に見られるオランダの植民主義的体質が問題にされ、「加害者としての日本・被害者としてのオランダ」ではなく、「被害者としての日本・加害者としてのオランダ」が強調された。林報告では戦時性暴力の問題について言及されたが、「従軍慰安婦」についてはその存在を否定する一部の人間たちからは強い反発が出され、それに対してフロアーからもそれへの再反論が主張されるなど、会場は一時騒然となった。

ざわついた雰囲気の中で、ラーベン報告、大庭報告、根本報告は会場に知的落ち着きをもたらしてくれた。ラーベン報告には、巡回展を企画した戦争資料館研究員の立場にありながら、われわれの批判を受け止め、植民地主義的体質を脱却していこうとする真摯な姿勢が窺えた。大庭報告は、戦争体験者としての具体的で説得力のある話であった。報告の最後で、戦争をめぐる歴史観の違いは簡単には解消できないが、対話を続ける努力が必要である、と述べられていたことは、正にこのワークショップの趣旨を

代弁してもらった気がした。根本報告は、ビルマ研究者としての立場から、「戦争は欧米支配からのアジア解放の戦いだった」とする意見に対して、ビルマでは必ずしもそう思われているわけではないことを紹介し、「現地の記憶」を目配りすることの重要性を気づかせてくれた。今回のワークショップでは、オランダ人と日本人の記憶については言及されたものの、肝心のインドネシア人についての記憶について言及されなかった。この点は主催者側としても承知はしていたが、さまざまな理由で対応できなかったのは残念であった。

（いまい あきお・東京外国語大学）